様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４３０９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６６００６６

研究課題名（和文）向老期にある認知症者と家族介護者のための教育プログラム開発に関する研究

研究課題名（英文）Study on educational program development for a person with presenile dementia and a family caregiver

研究代表者
小野塚　元子（ONOZUKA, MOTOKO）

京都橘大学・看護学部・講師

研究者番号：３０４４９５０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：認知症カフェでの支援のあり方に焦点をあて，向老期にある認知症者と家族介護者のQOLの維持・向上のための教育プログラムの検討を行った．
　認知症カフェは，初期認知症者の人とその家族を主な対象としているが，対象を限定せず地域住民の参加も受け入れる場である．カフェを認知症者らの居心地の良い場にしていくことが重要である．認知症カフェにおいて，当事者，家族とカフェスタッフの関係は，「対等な参加者」という姿勢が基本であった．対等な生活者として認知症の当事者，家族と向き合う姿勢を心掛けることがプログラムを運営していく姿勢として大切であることが示唆された．

研究成果の概要（英文）：Focuses on the way of the support in the dementia cafe and examined the educational program for maintenance, improvement of the QOL of a person with presenile dementia and the family caregiver.Dementia cafes, although the people of early dementia's and their families are the main target, a place will be held to accept the participation of interested local residents to dementia without limiting the subject. It was important that we made a cafe the comfortable place of a person with dementia and the family. In A City dementia cafe , we kept that the relationship between dementia people,the family caregiver and the cafe staff, that the attitude of "an equal participant" is the basic, that did not forget the "friendly considerations of mind" in the communication. It was suggested that it was important as the posture that dementia people and the family in mind as an equal dweller.

研究分野：老年看護学

キーワード：若年認知症　認知症カフェ　初期認知症

１．研究開始当初の背景

わが国の若年認知症者のケアに関する研究は，現在萌芽期にあり，老年認知症者のケアで蓄積してきた知見をそのまま使用することが困難であること，発達段階の特徴から老年認知症者とは別の支援ニーズがあるとの視点から，本人やその家族の支援ニーズを明らかにする研究を中心に取り組まれている[1-4]．これらの研究の若年認知症者本人の年齢に着目すると，40 歳代前半～60 歳代前半と幅広い．これは「若年」という幅広い年齢層を扱う定義からすると当然の結果であるが，人の発達段階から見ると壮年期・向老期という 2 つの段階を含んでおり，それぞれの発達課題は異なる．発達課題が異なれば，若年認知症者やその家族の支援ニーズが異なることが予測されるが，これまでの研究では，発達段階の視点を含めデザインされた研究はなかった．若年認知症者に対しては診断後からオーダーメイドの支援体制の形成の必要性があげられており[5]，発達段階の視点をふまえた研究知見は有用であると考える．中でも，発症年齢は，老年同様年齢が高くなるにつれ増加することから，向老期にある者が断然多い．向老期とは，一般的に 50 歳代後半から 60 歳代前半をさす．向老期は，老年期への移行期としで重要な時期である．わが国においては，戦後のベビーブーム世代（団塊の世代）がこれにあたる．この世代にある者は，現在の高齢者と価値観，ライフスタイルも異なるため，認知症ケアにおいて新たな支援策構築が必要である．しかし，研究開始当初，支援策構築の研究的取り組みは少ない状況にあった．

【文献】1)沖田裕子(2006)：若年認知症の家族が必要としている支援内容とその時期，日本認知症ケア学会誌 5(3)，480－491.　2)森明子(2008)：若年認知症のニーズについてインタビュー調査から，愛知作業療法，16，49-51.　3)鈴木亮子(2010)：若年認知症の人の家族を支援するうえでの課題，日本認知症ケア学会誌，9(1)，73－82.　4)田中晴佳(2010)：若年認知症の患者が診断を受けるまでの家族の行動プロセス，日本認知症ケア学会誌，9(3)，507－518.　5)厚労省（2008）：「認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト」報告書　「５．若年認知症対策」.

２．研究の目的

18 歳から 64 歳までに認知症を発症した人を，若年認知症とし老年認知症と区別し保健医療福祉の政策やケアを考える流れができつつある．本研究は若年認知症の中でも，向老期にある認知症者とその家族介護者に着目する．研究の目的は，向老期にある認知症者とその家族介護者の QOL の維持・向上のための教育プログラムを開発しその効果を検証することである．

３．研究の方法

当初は，①若年認知症の人とその家族介護者のサポートについて先駆的な取り組みを行っているグループ，機関の実態調査，②向老期にある認知症者とその家族介護者のインタビュー調査を実施する計画であったが，②のインタビュー調査の実施が困難であったため，①のみ実施した（H24～25 年度）．①の結果より，初期認知症者は向老期にある方が多い．そのため，初期認知症の人とその家族を主な対象としている認知症カフェでの支援のあり方に焦点をあて，教育プログラムを検討することとし，参加観察法によりデータ収集した（H25～27 年度）．③スウェーデンにおける認知症ケアの取り組みを視察し，プログラムの検討の参考とした．

４．研究成果

(1) 先駆的な取り組みを行っているグループ，機関の実態調査

①Ａ市における初期認知症カフェ（れもんカフェ）のとりくみ

平成 24 年 9 月に策定された「認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）」の中で，認知症の当事者・家族を地域で支える方策の１つとして「認知症カフェ」の普及があげられ，各地で取り組まれ始めた．Ａ市においては，平成 24 年 12 月から，認知症の当事者と家族が，できるだけ早期の段階から気軽に通え，初期の段階で適切なケアや支援に出会える場を提供することをめざし認知症カフェの取り組みを行っている．ここでは，これまでの取り組みの経過を整理し報告する．

【実践内容】

Ａ市コミュニティカフェを会場として，月 1 回を目安に休日の午後に開催している．

カフェの対象は，初期認知症者とその家族（10 名程度）であり，カフェスタッフの医師の外来受診者，および，医療機関等から紹介された者である．

タイムスケジュールは以下の通りである（表１参照）．

表１：カフェの流れ

時間	内容
13：00	準備（会場設営と打ち合わせ） スタッフの役割分担と当事者，家族，スタッフの座席を決める
13：30	受付
14：00	挨拶，ミニ講演（30 分） 医師による講話：認知症を取り巻く現状，若年認知症当事者の活動紹介 当事者による講話：認知症発症までの生活，診断を受けてからの生活と思い
14：30	ミニコンサート（30 分） シンガーソングライターによるピアノの弾き語り．選曲は，オリジナル曲と参加者からのリクエスト曲で構成

15：00	ティータイムとトーク お茶とケーキを囲み，会話を楽しむ．スタッフの一人が店長役を務め，緊張緩和や会話を促進するためにテーブルを回る ＊必要に応じて個別相談
16：00	終了，スタッフによるミーティング

カフェスタッフは，A市地域包括支援センター職員，訪問看護ステーション看護師，デイサービス職員，医師，行政職員，大学教員などの専門職である．カフェのスタンスとして，以下の3点を心がけて実施していた．

・認知症の当事者，家族とカフェスタッフの関係は，「対等な参加者」という姿勢が基本
・コミュニケーションの中で「フレンドリーな配慮のこころ」を忘れない
・毎回の様子を記憶媒体に保存し，カフェスタッフの支援技術向上に役立てる

【結果・考察】

開催は，平成24年12月から平成25年5月までに5回で，参加者とその内訳は表２の通りである．

表２：参加者状況　（名）

回	当事者	家族	ｽﾀｯﾌ	その他	合計
1	6	4	23	21	54
2	4	4	15	2	25
3	7	7	16	2	32
4	5	5	13	10	33
5	7	7	11	7	32
延べ	29	27	78	42	176

＊その他：地域住民，報道関係者など

記憶媒体に保存した毎回の様子は，アルバム風にまとめ，当事者，家族に渡したり，初めての参加者にカフェのイメージを紹介するために用いていた．

回を重ねるごとに，会話が弾み，笑い声や笑顔が多くなるなど，当事者・家族・フタッフ間の交流が進み，「対等な参加者」として自然体で過ごすことができていた．そして，家族からは，家庭内で本人と認知症を話題にし，思いを表出しやすくなったとの声を聴くことができた．

初期認知症者への支援経験がないスタッフがほとんどであり，カフェへの参加は関わりを学ぶ場にもなった．

②認知症カフェにスタッフとして参加した専門職の学びと課題

認知症ケアに関わってきた専門職であっても，初期認知症者のケア経験が少ない者が多い．認知症カフェは，学びの場でもある．認知症カフェでの支援の在り方に焦点をあて，教育プログラムを検討するにあたり，専門職の学びを明らかにし，課題を検討することは有用だと考え取り組んだ．

【目的】

認知症カフェに参加し，スタッフとして参加する専門職（以下，スタッフ）のミーティング内容を分析することで，カフェを通しての専門職の学びを明らかにし，課題を検討する．

【方法】

研究期間：H24年12月～H26年9月．

対象：カフェにスタッフとして参加する専門職(看護職・福祉職)．

データ収集･分析：カフェ後に実施したスタッフミーティングでの発言内容を記録し，作成した逐語録をKJ法にて帰納的に一般化した．発言内容は，参加者の様子と発言内容に対する気付き,参加者へのスタッフの関わり,の2点である．

倫理的配慮：所属の倫理審査委員会の承認を得た後に，対象者に研究の目的･方法・倫理的配慮について十分な説明を行い，了承を得た．

【結果】

カフェ後のミーティング内容からスタッフの学びは，2つのカテゴリーと7つのサブカテゴリーが抽出された(表３参照)．

表３：カフェスタッフミーティングにおける専門職の学び

1．対等な生活者として馴染みの関係を生み出せる場	
サブカテゴリー	1)自分の判断で席に着き，カフェを楽しむ
	2)対等な生活者
	3)馴染みの関係
	4)特別なものではない当たり前の雰囲気
2．専門職である自身の関わり方の発見	
〃	1)当事者と家族から学ぶ
	2)初老期認知症者と家族の戸惑いへの対処
	3)急速に認知症が進んだ当事者への配慮と支援

【考察】

スタッフは，参加を通してカフェの意義と，認知症者を理解する前提となる支援の姿勢を学んでいた.具体的には，①カフェは,認知症の初期から適切なケアや支援に結びつく,気軽に寄れる場として有用であるということ，②当事者らとスタッフが対等な関係性の中でその場を楽しみ，共有する「対等な生活者」という意識をスタッフ自らが徹底する姿勢が重要であること，である．これらを通して,当事者の新たな一面や,家族が当事者とは異なる緊張感を有することに気づく機会につながっていた.そして，初期認知症者と家族の戸惑いに対処するという経験を通して,カフェが介護に向かう力を生み出す機会になっていることに気づき，家族会とは違う側面も有すると感じていた.これが③参加者の事例を通して具体的な関わり方や支援の

学びにつながり，カフェの経験からつかめた接し方の知識を蓄積する場にしていた．
　一方，当事者の認知症の状態は一様ではなく，それに応じた配慮と対応できるスキルを身につける必要性を課題と認識していた．

(2) スウェーデンの認知症ケア視察
【目的】
　福祉国家といわれるスウェーデンでは，1992 年に医療及び保健福祉行政改革（エーデル改革）を実施した．これにより，社会的入院が解消され，地域に暮らす高齢者や障害者へのケアの充実が成果として得られた．同時に，サービス利用者の加齢に伴う認知症の増加によるケアの工夫の必要性が課題となっている．本研究では，スウェーデンの先進的な介護システム現場の見学を通して，認知症ケアの実践に示唆を得ることを目的とした．
【方法】
期間：H25 年 3 月 22 日～29 日の期間のうちの４日間
対象：スウェーデンにおける典型的な中都市である A 市の安心住宅・認知症ナーシングホーム・高齢者介護付き特別住居で認知症高齢者ケアに携わっている看護職と福祉職
データ収集方法：日本語・スウェーデン語の通訳者を介してのインタビュー，支援場面への同行による観察
データ収集内容：インタビュー：対象者の基本属性，認知症ケアで大切にしていること，実践を通して課題と感じていること，観察：支援場面での関わり方の実際
分析方法：作成したフィールドノートをもとにした，意味内容の分析．
倫理的配慮：発表にあたり，対象者に個人情報及び秘密保持について説明し，同意を得た．
【結果】
対象の基本属性は，以下の通りである．

職種	アンダーナース*	シルビアナース**	アクティビティ担当
所属	安心住宅，認知症ナーシングホーム等	高齢者介護付き特別住宅	高齢者介護付き特別住宅
人数	５名	１名	１名

＊　：基礎的な医療と看護の学習を修めた介護スタッフ
＊＊　：シルビアホーム（認知症の母をもつシルビア王妃設立の施設）で教育を受けたナース

　対象がケアの中で大切にしていることとして，以下の a，b の２点が抽出された．
a.本人が楽しく過ごし，自立した生活を送れるようケアすること
＜インタビューからの抜粋＞
・アンダーナースもいるが，できるだけ自立して本人ができるように働きかけている（安心住宅アンダーナース）
・アクティビティに一般住民も参加でき楽しく過ごすことが，健康の維持につながる．結果として，施設への入居者が少なくなって経済的なコスト面からの節約になる．（安心住宅アンダーナース）
・認知症の進行に伴って個々の状態に応じたアクティビティプログラムが，用意されている．（高齢者介護付き特別住居アクティビティ担当）
・それぞれの入居者にコンタクトパーソンを決めて，30 分/日の関わりがある．（シルビアナース）
b.入職後の一環した認知症ケアの教育により質の高いケア実践を心がけていること
＜インタビューからの抜粋＞
・アンダーナースは，経験と知識のバランスを大切にしている（認知症ナーシングホームアンダーナース）
・アンダーナースの要件が一般のケア経験だけでなく，認知症ケア経験も有している．入職後も認知症ケアに関する講習を継続して行う．（認知症ナーシングホーム）
・コミューンの認知症専門看護師と連携し，相談することもある，シルビアナースによるスタッフ教育も行われている（認知症ナーシングホーム）
・シルビアナースの果たす役割は，リレーションシップ，コミュニケーション，チームワーク，家族支援である，シルビアナースとして重要と考えていることは，問題となる前に見つけ出すこと，QOL を高めること，認知症を持つ人と向き合うこと（例：本人が覚えているわけではないことを念頭に，毎日が新しい出会いであると考え対応する）（シルビアナース）
　対象が実践を通して課題と感じていることは，移民が多く，人種が多様であると同時に文化・宗教も多様であることにより、対応が難しいということであった．
　支援場面で特徴的なこととしては，以下の３点があげられた．
・コミュニケーションを重視し，福祉用具を活用しながら本人の自立を促し，限られた時間で効果的な介入を行っていた．
・担当者が端末機器を活用しながら，対象となる高齢者の情報を
共有し，査定員により決められたサービスを勤務時間内に効果的かつ効率的に行っていた．
・時間に沿って業務をこなすというのでなく，信頼関係のもとに丁寧なケアが提供されていた．
【考察】
　スウェーデンでは，国のガイドラインによる認知症ケアの教育プログラムに基づきケアの質が保証されていた．また，常にコスト面を考え，在宅生活の維持を意識していた．
　以上より，認知症ケアに携わる者は，質の高いケアの提供を意識するとともに，常にコスト面も意識して実践していくことが必要

であることが示唆された.

(3)まとめ

今回，認知症カフェでの支援のあり方に焦点をあて，教育プログラムの検討を行った.

認知症カフェは，初期認知症者の人とその家族を主な対象としているが，対象を限定せず認知症に関心を持つ地域住民の参加も受け入れて開催される場である．誰でも気軽に集える場が「カフェ」である．それがカフェのよいところである．カフェを認知症者と家族の居心地の良い場にしていくことが重要であった．A市における認知症カフェにおいて，認知症の当事者，家族とカフェスタッフの関係は，「対等な参加者」という姿勢が基本であること，コミュニケーションの中で「フレンドリーな配慮のこころ」を忘れないことを心掛け運営にあたっていた．専門職は，無意識のうちに援助する側－される側の関係を作りがちである．そうではなく，対等な生活者として認知症の当事者，家族と向き合う姿勢を心掛けることが大切であった．そうすることで，居心地のよいカフェになっていくと考える.

スウェーデンの認知症ケアの視察において，シルビアナースは，認知症を持つ人と向き合うことが重要であるとインタビューの中で述べていた．人として認知症の人にどう関心を寄せていくかが重要であるといえる．居心地のよいカフェを作り出す上においても，この点は重要である.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 家根　明子、小野塚　元子、廣川　聖子、高橋　晶、認知症者支援－専門職にとっての認知症カフェのもつ意義と課題、奈良学園大学紀要、査読あり、第２集、2015、113－118

② 家根　明子、小野塚　元子、廣川　聖子、高橋　晶、スウェーデンにおける高齢者支援の実際、奈良学園大学紀要、査読あり、第２集、2015、119－125

〔学会発表〕（計 6 件）

① 家根　明子、小野塚　元子、認知症カフェにスタッフとして参加した専門職の学びと課題、日本老年看護学会第 20 回学術集会、H27 年 6 月 12 日、パシフィコ横浜（神奈川県、横浜市）

② 小野塚　元子、家根　明子、スウェーデンにおける認知症ケアの実践～看護職・介護職へのインタビューと同行訪問を通して～、第 16 回日本認知症ケア学会大会、H27 年 5 月 23 日、ホテルさっぽろ芸文館（北海道、札幌市）

③ 小野塚　元子、家根　明子、深山　つかさ、鈴木　久義、北村　隆子、First on support for patient with early-stage dementia:Dmentia café activities、第 30 回国際アルツハイマー病学会、H27 年 4 月 17 日、パース（オーストラリア）

④ 家根　明子、小野塚　元子、深山　つかさ、鈴木　久義、北村　隆子、Second report on support for patients with early-stage dementia: the significance of and issues associated with dementia cafés for these patients and their family members: Practicing ″Café for Dementia″ as a Place to Support People with Early Dementia、第 30 回国際アルツハイマー病学会、H27 年 4 月 17 日、パース（オーストラリア）

⑤ 家根　明子、小野塚　元子、認知症カフェにおける初期認知症者と家族に対する支援のあり方～ミーティングにおける専門職の語りからの分析～、日本老年看護学会第 19 回学術集会、H26 年 6 月 28 日、愛知県産業労働センター（愛知県・名古屋市）

⑥ 小野塚　元子、家根　明子、A市における初期認知症カフェ（れもんカフェ）の取り組み、第 16 回日本老年行動科学会愛媛大会、H25 年 9 月 1 日、愛媛大学（愛媛県・松山市）

６．研究組織

(1)研究代表者

小野塚　元子（ONOZUKA, Motoko）
京都橘大学・看護学部・専任講師
研究者番号：30449508

(2)研究分担者

家根　明子（YANE, Akiko）
敦賀市立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：70413193

北村　隆子（KITAMURA, Takako）
敦賀市立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：10182841

深山　つかさ（MIYAMA, Tsukasa）
京都橘大学・看護学部・助教
研究者番号：70582865

鈴木　久義（SUZUKI, Hisayoshi）
京都橘大学・看護学部・助教
研究者番号：10638167